

特集

日本の桜を守る

国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所

勝木俊雄、加賀谷悦子、石原誠



鳥取県鳥取城跡・久松公園の‘染井吉野’1923年植栽の古木だが、根際からの萌芽を繰り返して長生きしている



青森県弘前公園の‘染井吉野’一年を通して計画的に管理されている

福島県郡山市開成山公園の‘染井吉野’1878～1880年植栽と考えられ、樹齢およそ140年だが見事な花を咲かせている



アメリカシロヒトリ幼虫 (撮影：田村繁明)

桜の名所の管理

日本の春を彩るサクラ。最近では日本人だけではなく、お花見をするために外国からも多数の観光客が日本を訪れているほど人気があります。そして、日本全国に「桜の名所」と呼ばれる植栽地が数多くつくられています。ところで、サクラは植えられているだけのように見えますが、現在こうした桜の名所において管理の重要性が注目されています。

桜の名所において、明治時代以降は、染井吉野が中心でしたが、近年では河津桜や八重紅枝垂なども利用されています。また、はるかのように新しい栽培品種が開発されているほか、クマノザクラのように野生のサクラにも目が向けられています。しかし、その多くは管理技術が確立しておらず、植えても失敗する事例が見られます。こうしたことも理由なのか、代表的な桜の名所では今でも、染井吉野が植えられています。染井吉野はたいへん優秀な栽培品種で、花の観賞価値だけではなく、成長の早さや幅広い環境への適応性という面でも、比較的育てやすいサクラです。100年以上の利用の歴史もありますので、苗木生産から植栽50年くらいまでの管理技術もほぼ確立しています。

もっとも、染井吉野でも、新たな管理上の問題が生じています。染井吉野は俗に短命だと言われますが、樹齡



はるか

‘はるか’は、東京都八王子市にある森林総合研究所多摩森林科学園で、もともと研究用に実生から育てられていたものでした。母親は^{オモイガフ}‘思川’で大輪八重咲きの花をつけます。また

‘はるか’の花 淡紅色で大輪八重咲きの花弁が平開する

樹高2～4m程度でもよく花をつけることが特徴です。平成25年に放映されたNHKの大河ドラマ「八重の桜」にちなみ、主演の綾瀬はるかさんによって‘はるか’と命名され、平成24年に品種登録を出願しています。福島県では、この八重桜を東日本大震災からの復興のシンボルと位置づけ、復興支援に対する感謝の気持ちとして、全国に‘はるか’の苗木を贈呈・植樹するプロジェクトを進めています。少しずつ様々な場所で‘はるか’を見ることができるようになってきており、東京都内では、多摩森林科学園のほか、千代田区霞ヶ関の農林水産省庁舎前や、秋篠宮両殿下が記念植樹をされた八王子市富士森公園などでも見ることができます。



農林水産省前の‘はるか’

7年生の接木苗



台風により幹が折れたサクラ 腐朽害によって幹の強度が低下したサクラは危険で伐採処理が必要になることもある



ゴマダラカミキリ成虫



虫害対策

100年を超えても生育可能な長命な樹木です。若齢であれば放ついても元気に育ちますが、高齢のサクラは、日照や水、土壌といった環境を整えらるとともに、てんぐ巣病やコスカシバなどの病虫害への適切な対応が必要です。特に幹の腐朽は深刻な事故を生じる危険性がありますので、その対策は欠かせません。増加しているこうした高齢サクラへの対策のほか、新たに侵入してきたクビアカツヤカミキリなどの外来種や、新たにその存在が知られるようになった増生病^{てんぐ巣病}、気候変動による生育適地の変化などの新たな問題が生じています。お花見のためには、こうした問題に対応した管理が重要なのです。

人にとっては見て楽しいサクラですが、その葉や幹をおいしいと食べて過ごしている虫たちがいます。葉を食べるものではアメリカシロヒトリが有名です。戦後まもなく日本にやってきた外来生物で、昭和の頃には大発生が見られました。幼虫がサクラの葉を食べ、木の下にはたくさんのコロコロした虫糞が転がります。樹皮の下(内側)を食べている虫には、コスカシバやゴマダラカミキリがいます。コスカシバは幹のごつごつと出っ張った内樹皮の厚いところを好み、ゴマダラカミキリは地際で見つかることが多いです。コスカシバの成虫は翅が透明な蛾で、一見



クビアカツヤカミキリ成虫



コスカシバ成虫



クマノザクラ

クマノザクラの花 淡紅色で中輪の花は鑑賞価値が高い

平成30年の春、新しいサクラの野生種が発見されたというニュースが全国に流れました。クマノザクラと名付けられたこのサクラは、紀伊半島南部の奈良・三重・和歌山の3県に分布

していますが、これまでヤマザクラとして扱われていました。しかし、花や葉の形態、開花期などの特徴を詳しく検討すると、ヤマザクラやカスミザクラなどこれまで日本で報告されているいずれの野生種とも異なることが判ったのです。クマノザクラの花は、白～淡紅色で‘染井吉野’よりも早咲きであることが特徴です。このため、自生地では‘染井吉野’に代わる観賞用のサクラとして利用が期待されています。すでに苗木生産も進められ、平成31年2月には三重県紀宝町で植林もおこなわれました。ただし、自生地のクマノザクラは外来の‘染井吉野’やオオシマザクラとの交雑の影響が懸念されており、今後の適切な保全と利用の両立が求められています。



三重県紀宝町でおこなわれたクマノザクラの植林 (写真提供 中村昌幸)

蜂のように見えますね。これらは日本にもとからいる虫ですが、近ごろサクラを食い荒らして枯らしてしまう厄介者が海外から来ました。クビアカツヤカミキリと言うこのカミキリムシは、幼虫が樹皮を猛烈に食い進み、サクラを枯らしてしまうことがあります。恐ろしいことに、このカミキリムシはたいへん繁殖力が高く、飼育下では千を超える卵を産むメスがいます。そのためか、一度被害がでると、なかなか抑え込むことができません。現在7都府県で被害が出ており、成虫は9都府県で見つかっています。この虫は放っておけません。研究者と企業が協同して、これまでに有効な農薬を見つけて登録をとりました。さらに、平成30年度からはイノベーション創出強化研究推進事業において、「サクラ・モモ・ウメ等バラ科樹木を加害する外来種クビアカツヤカミキリの防除法の開発」という課題を始まりました。防除法を確立して、日本のサクラを守っていききたいと一同熱い心で研究に取り組んでいます。もしクビアカツヤカミキリの成虫や被害木を見かけた場合、土地や施設の管理者、地域の自治体窓口へ連絡していただけたらと思います。



桜と増生病

また、サクラを育てて管理する際には、虫害だけでなく、病気への対策も必要です。増生病とは、組織細胞が異常に分裂



増生病対策（伝染源の除去）



‘染井吉野’に発生した大型こぶ症



オオシマザクラ系雑種に発生した連鎖球型かいよう症

増殖して球状に膨らむ「こぶ」や、組織の壊死と再生が繰り返され、陥没隆起が起ころ「かいよう」を起こす病気で、主に糸状菌や細菌の感染によって起きます。サクラ類では、今世紀に入ってから、染井吉野に細菌性こぶ病の発生が報告されました。これは「サクラ類こぶ病」とよばれていますが、染井吉野の被害はまれで、主にヤマザクラなどの野生種によく発生しています。一方で、原因不詳の新しい増生病が発生しています。染井吉野の太枝に大型のこぶを生ずる「大型こぶ症」、栽培品種の枝に球状のかいようが連なって発生する「連鎖球型かいよう症」です。これらの増生病の発生には病患部に存在する細菌の関与が疑われています。連鎖球型かいよう症では、冬桜などのオオシマザクラが関与した栽培品種での被害が大きいこと、大型こぶ症では高齢化した、染井吉野に現れやすく、枝枯れによって衰弱を起こすことが分かってきました。

増生病の対策として、伝染源の除去や無病苗の入手、防風と光環境の確保が考えられます。微生物病原の増生病は伝染するので、伝染源となるこぶやかいようを可能な限り除去し、主幹や枝の若返りを図ります。激害木では伐倒も検討します。また、感染苗から病気を広げないよう、無病苗を手して植栽します。サクラ類こぶ病では、台風で拡大する一方、日光がサクラの抵抗性を高めるので、風当たりの強い場所や日陰を避けて植栽します。